

2008年6月21日(土)発行

始良歴史ボランティア協会ニュース

〒899-5421

始良町歴史民俗資料館気付

TEL 0995-65-1553

Fax 66-5820

発行 始良歴史ボランティア協会

会長 橋木 雅晴

編集 宝泉 孝志

あいらの歴史と物語

No. 4

山田の凱旋門

「凱旋門」と言えば、パリのエトワール広場にあるものが浮かびます。

日本では、日露戦争(明治37、38年)の勝利を記念して、従軍した兵士を歓迎する凱旋門が、日本の各地に建造されました。明治38年10月、東郷平八郎連合艦隊総司令官一行を迎えた東京三ツ矢の凱旋門はあまりにも有名であったそうです。鹿児島県では、いづろの広馬場の角に熊本と宮崎3県連合のすばらしい凱旋門を建設して、凱旋の部隊を大歓迎したそうです。今はありません。

現存してるものが二つあります。

一つは、我が始良町の山田地区公民館の左手の通路にある石造の凱旋門であり、もう一つは、静岡県浜松市にある煉瓦造りのものであります。両方とも国の登録文化財に指定されています。

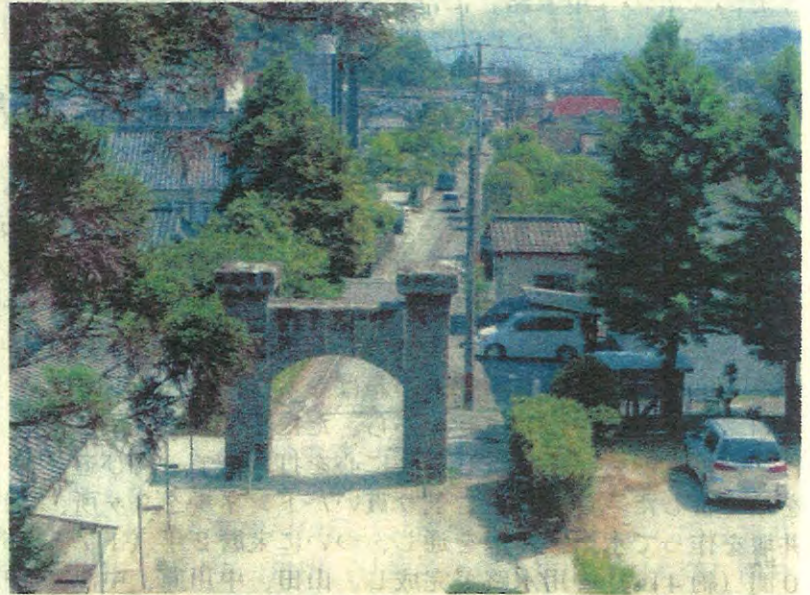
山田のアーチ式の凱旋門は、日露戦争に、当時の山田村から従軍した109名の方々の無事の帰還と戦勝を記念して、明治39年3月に、山田村兵事会が建設したものです。

日の丸が打ち振られる中を、帰還した従軍者たちがこの凱旋門をくぐると、迎える村民の人々の歓喜に満ちた声やどよめきが、どっと村中に響き渡り、山々にこだまし、天まで届いたことでしょう。

無事に帰還できなかつた方々も、英霊となって従軍者の胸にしっかりと抱かれて通過したことでしょう。

近くの山頂に招魂社が祀られ、慰霊碑も建っています。ちなみに、陸軍12名、海軍2名の戦死者を、『始良町郷土誌』に数えることができます。

なお、現在の道路から見ますと、引き込んだところにありますが、当時は新馬場からまっすぐに凱旋門に至り、凱旋門をくぐると右に直角に曲がって上名へと行くのがメインロードだったのです。その後今の県道の開通からはずれたために今に残ったのでしょうか。門の位置が当時の道路の様子も語ってくれています。 文 西田 実



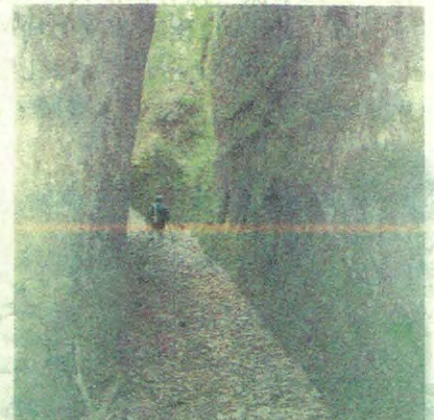
新馬場通を帰還従軍兵士たちは歓呼の声の中を歩調をとって

山田城跡(玉城山城) 夢想

山田城は山田地区の上名中之城にあります。室町時代に川越氏という豪族によって築かれた山城です。島津氏が藩生氏や祁答院氏と戦い、岩剣城(剣の平)が落城(1554年)後の弘治3年(1557年)島津貴久によって帖佐城(平安城)と共に平定されています。そして梅北國兼が地頭として配置されます。

地形を平面的に見ると、曲輪を胴体、空堀を手足に見立てるとまるで蜘蛛のように見えます。合戦の想定では行き止まりの空堀に敵を誘い込み、上から突き崩して殲滅させる作戦であったのでしょうか。一度に大勢の兵が攻めることができない構造になっています。空堀や切り通しは鹿児島島の土壌、地形を上手く利用していると感心します。このような山城で大勢の軍勢に取り囲まれ、孤立したとき、水の便や汚物処理などどのようにしたであろう……

かと想いを馳せてみます。この山田城は破壊されず、戦国時代の当時の姿を残す代表的な山城の一つに数えられると思います。何遍散策してもおもしろい城跡です。注 山城跡の探訪は危険が伴います。探訪の経験者と同行してください。また、探訪は冬がベストシーズンです。 文と写真 濱口 純則



山田城の空堀通路

台地に水を～水口ゆきえのねがい～

中津野用水路・4kmの用水路をたどって

『始良町郷土誌』によると、町内には用水路工事着手によると新田の開発が各地域で行われていたことが分かります。上名、宇都川、中津野、山崎、寺師、上溝、中溝など大工事のものが挙げられます。

この新田開発の多くは、江戸（藩政）時代のころのものです。山田川、思川を取水源としています。わたしたちが、かねて見慣れている「水」・「川」・「用水路」には、先祖から今日の人々に関わる脈々として流れる川の『水』のように深い『歴史』が流れ生きています。

今回は「中津野用水路」の歴史と用水路めぐりをしてみました。

高台の中津野は水利がなく、苦勞の割に収穫量の少ない陸稻しか作れない、つまり周辺地区に比べても貧しい所でした。

宝暦（今から約250年前）のころ、当時15歳になる少女「水口ゆきえ」は、深水の女生嶽に登り、山田、中川原、中津野一帯を股のぞきで見渡し、山田川から用水路を開けば中津野まで水が引けることを知り、集落の大人たちを説得して、皆で工事を始めました。工事が半ばになると農繁期とも重なって、協力者たちが一人減り、二人減りしてとうとうたった一人で難工事を進めねばならなくなりました。ゆきえは孤独に耐え、手に血をにじませながら、ただ黙々と働きました。工事から抜けていた人々も、そのうしろ姿に心を打たれて、再び道具をとって協力を始めました。途中岩盤を割り貫いたトンネルを9ヶ所、山田川に山下井堰を作って水門から水を通し、ついに宝暦2年（1752年）1950間（約4km）の用水路が完成し、山田、中川原、中津野の田に待望の水を注ぐことができました。通水の喜びは村人こぞっての大歓声だったでしょう。

しかし、その後、この利発な少女は「将来何を企てるか分からない末恐ろしい」と危惧の念を抱いた権力者側の手によって、中川原と中津野の境にある兩社の山中で殺されてしまいました。同年12月、中津野の水口邸の一角に石祠がつくられました。ゆきえの靈碑を安置して冥福を祈り、浄財寄進碑も建てられました。

中津野地区公民館より南へ少し行くと今も「水口ゆきえの墓」が残っています。

昭和42年（1967年）に町の文化財審議会と血縁の方々、地元の協力で墓の補修と供養が行われました。昭和49年（1974年）に町の文化財（史跡）に指定されています。

灌漑面積山田32ヘクタール、中津野34ヘクタールが恩恵を受け、水田に稲が実ることとなりました。

ゆきえの子孫（縁者）が代々水守をしてきました。山下井堰から水を流す日は、井堰や蒲生川の水神を祀り、「シトギ」（神前に供える米の粉のだんご）を捧げる習わしになっていました。シトギと水守の費用をまかなう「しとぎ田」が与えられていました。

用水路をたどってみて、機械・道具の少ない時代の工事は大変であつ

たろうと思われれます。中川原のトンネルで耳を澄ましますと、「ゆきえ」の金槌の音を連想さ水音が聞こえていました。

右 中川原付近の隧道

左 水口ゆきえ嬢記念碑

山下井堰近くにある



公民館付近の水路



ゆきえの墓



県道より中津野遠望



長い旅に出た タノカンサア

今、私の手許に三体のタノカンサアが鎮座している白黒の写真があります。昭和35年頃に撮されたものらしいです。

現在三拾町には、二体のタノカンサアが、今日も広い田んぼを見つめています。その姿はユーモラスで、素朴で、土の香りが漂ってきそうです。

消えてしまったタノカンサアについて、いろいろお年寄りに聞きましたが、確かな手応えはありませんでした。戦前までは、秋にタノカンコ（田の神講）が催され、タノカンサアは顔の白い化粧や口紅つけてもらい、大人たちは、あちらの親戚、こちらの友人・知人に黒砂糖があん代わりに入った餅を配り歩くのに大わらわだったそうです。旅に出掛けたタノカンサアはどこの田のほとりで、豊作を祈って使命を果たすために、今もがんばっているのでしょうか？逢ってみたいものです。



上の写真の三体中、右端が消えた田の神。

右はその拡大写真、よく見ると、口をゆがませたユニークなお顔である。



文 本多 幸子

黒島どんと老神どんの池争い

むかし、山田の黒神どん（神社）と中津野の老神どん（神社）が、住吉池を手に入れることで仲違いをしてしまいました。ふたりの神さまは約束して、出発時刻を決めて早く池についた方が池をとることにしました。

老神どんは近いので牛、黒神どんは遠いので馬で行くことにしました。

黒神どんは足の速い馬なので、

「なーに、老神どんは牛だ、いくら近くでも俺の馬には勝てまい」と、途中で馬を休ませ、自分もぐっぐり遊んでしまいました。

て、池の着いてみると、これはしたり、もう老神どんは着いているではありませんか。これで約束通り住吉池は老神どんのものになりました。

しかし、約束とはいえ、黒島どんの気持ちは取まりません。帰る途中鞍を付けたままの馬を川の淵に蹴落とし、後を付けてきた自分の子供もポイポイと蹴飛ばしてしまいました。このこども達が飛んでいったところが豊留と東餅田でそこで早馬神社や小鳥神社が始まったと言うことです。

こんな伝説が生まれたのはなぜでしょうか。老神どんは山を支配した大山祇神の仲間である猿田彦を、黒島どんは海を支配した航海の神多岐理姫を祀っています。この山と海との支配争いが、住吉池の奪い合いおいう伝説になって語り継がれてきたものと思われま。



いろいろな伝説を青い湖底に秘めた住吉池

林に囲まれて静かなこの湖は、蒲生町・始良町の境にあり、浮き桟橋の整備されブラックバスの釣り場として県下に知られ、毎日釣り人が訪れています。また、蒲生町営のキャンプ場・ロッジもあり、遊歩道、周回道路も整備され公園として賑わいつつあります。遊泳は禁止されていますが、手軽な行楽地として弁当を持って出掛けたいかたがでしょうか。

文 恒見 勝則

身近な田の神たち 山田地区近辺



碑文〔文化2年（1805年）〕

西田上下郷中寄進 西田の田ノ神

西田の田ノ神（町指定有形民俗文化財）

太くがっちりした鼻、ふくよかな頬、下がった眉と目尻、口が小さいのは不平不満を言うなということか、顔は丸まるとして実に福々しい。頭にはシキをかぶり右手にメシゲを持ち、左は小手をかざしておどけている。濃い朱色に染まった顔は、神職が少々酒に酔って田ノ神舞を舞っているような人間臭さを感じられる。昭和50年頃の写真では袴の裾から足が出ていたようだが、今は盗難防止のためコンクリートで膝下まで固められている。自由に神舞が舞えずに困っているようにもみえる。ほのぼのとした明るさとユーモアのある田ノ神である。

大山の田ノ神

旧大山村の村社・日枝神社の東斜面と大山自治公民館の間にある。両手でメシゲを持って舞う田ノ神姿でどっかと座っている。その昔自治公民館の場所には明治9年に日枝尋常小学校が開校し、明治42年に山田尋常小学校に統合されるまで、学童たちの勉強も見守ってくれた田ノ神である。

顔の真ん中にしめ縄をまとい額には淡い黄色、頬と口に紅をさし、にこやかに笑っている。108cmの大きな体で顔の目鼻立ちは摺り減っているが、顔の造りが愛らしさにあふれている。近くのグループホームの皆さんの散歩コースらしく、うやうやしく手を合わせて祈っている姿は、昔の村人が米に生き米に苦しみ祈った姿と重なって見える。通りがかった古老の話では、加治木町境の山中に隠れ念仏の祠や石切場があって、大山村の墓石はそこから切り出して建てたという。田ノ神像もその石を使って彫ったらしい。造形的巧拙は別にして上手に作られた田ノ神より、この田ノ神のような素朴さに真の魅力があるように思われる。



大山の田ノ神

中川原の田ノ神

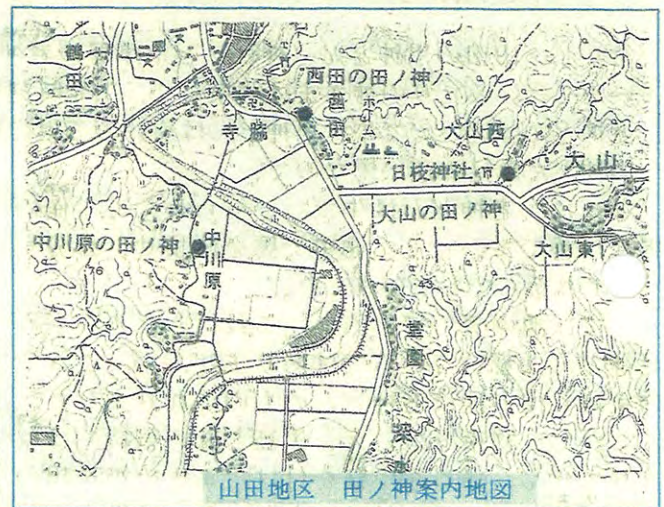


中川原の田ノ神

少し頭を下げてシキをかぶり、右手にメシゲを持ち、左手は小手をかざしている。小手をかざした田ノ神は他に西田と春花にある。着物の両袖をタスキで結び、田ノ神舞を舞っている。両手の動きは西田の田ノ神とよく似ているが、顔面が摺り減って表情

が消えているのは惜しい。凶作の腹いせに叩かれたか、転ばされて傷ついたのかも知れない。田ノ神は何をされても崇らぬ神といわれ、豊作を祈る村人の泣き笑いを受け止めながら、何事もなかったように淡々と見守り続けてきてくれたのであろう。

文と写真 橋木 雅晴



山田地区 田ノ神案内地図

始良町歴史ボランティア協会が発足して一年になりました

始良町は県の中心的位置にあります。そのため覇を争った戦国の時代には合戦の場となり、三州が統一されると島津義弘公の居所となり、政治のもう一つの中心でもありました。そのような史跡に富んだ始良町を、多くの人に知ってほしいと思いガイド協会を結成しました。現在、会員8名、本年度の新規会員希望者も研修中です。

始良町内外の方々に始良町の歴史、地勢、人情を知っていただくためがんばります。自治会・子供会・老人クラブなど三人以上ならガイドいたします。

経費は無料ですが、例外としてガイドの車でガイドしたような場合はガソリン代として500円（グループで）をいただく場合もあります。その他はいっさい受け取らないことを申し合わせております。どうぞ（連絡先）始良町歴史民俗資料館（電話 0995-65-1553）へ申し込んでください。お待ちしております。

編集部